

思いや考えを言語化する力を育成する授業構想

－「言葉にならない」ものと向き合うことを通して－

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 石丸青空

1. 論者の問題意識と今年度の研究について

(1) 論者の問題意識

平成29年・30年に学習指導要領が改訂され、高等学校では今年度から新しい学習指導要領が導入されることとなった。各教科の目標が「〇〇の見方・考え方を働かせ…」という文言で始まり、〇〇の部分に当該教科の特質が現れている。国語科の目標は、「言葉による見方・考え方を働かせ」となっている。その「言葉による見方・考え方を働かせ」の解説が以下のようになされている。

言葉による見方・考え方を働かせるとは、生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる。様々な事象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的としない国語科においては、言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている。このため、「言葉による見方・考え方」を働かせることが、国語科において育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることにつながることとなる。(注1)

文部科学省 高等学校学習指導要領(平成三十年告示) 解説国語編

国語科における学習対象は「言葉そのもの」と示されており、国語科では「言葉」が非常に重要であるということが分かる。

論者は学部時代に、言葉とは「ものの名前」ではなく言葉が対象や世界を現象させるとい

うソシユールの言語観や、世界を「主体と客体」「主体と主体が捉えた客体」の二項で捉えるのではなく主体が捉えた客体のその先に〈客体そのもの〉を想定するという日本近代文学研究者である田中実氏が提唱する「第三項理論」を学び、「言葉とは何か」を考えることを通して自己や他者を問い直すということについて考えてきた。

「言葉とは何か」と問いかけると、多くの人が「コミュニケーションのツール」と答えるだろう。それは決して間違っていないし、その通りである。しかし、それだけでは言葉の一面的な部分しか捉えられていないのではないかと論者は考える。言葉はただのコミュニケーションのツールというだけではなく、私たちの認識に大きく影響している。私たちは言葉というフィルターを通して対象や世界を捉えているのである。想像以上に言葉というものが私たち自身に影響を及ぼしていることを痛感し、「言葉そのもの」を学習対象としている国語科において「言葉とは何か」を考えることが非常に重要であるのではないかと考えるようになった。

論者は、「言葉とは何か」を考えることは、自己や他者を問い直すことに繋がると考えている。自分に見えているものは、自らの言語システムで捉えたものに過ぎない。では、今自分に見えているものを全てとじてしまっているのだろうか。他者にはどのように世界が見えているのだろうか。多様化が進み、「個」というものがより大切にされるようになった現在、自己と他者で世界の見え方・認識の仕方が違うということは当たり前のことで多くの人が分かっていることだとは思う。私はそこに「言葉」とい

う面からアプローチをして、言葉と向き合うことを通して、自己や他者、世界を問い直すことができる授業を考えていきたいのである。

(2)今年度の研究について

今年度の問題意識は、昨年度の実習を通して感じたことが基となっている。昨年度の授業観察中に、「語彙力がないからわからない」や「うまく言葉にできません」という声を頻繁に耳にした。また、明確な答えのない問いに対して答えられないという様子も目にした。例えば、「「それ」という指示語が示すものは何ですか」と問いかけると自然と手が挙がって発言するのだが、「〇〇に関してどのように考えますか」というような問いにはなかなか手が挙がらない。このようなことから論者は、生徒にとって自分の思いや考えを言葉にすることは難しいのではないだろうかと考えた。

これらのことを踏まえ、今年度の研究テーマを『思いや考えを言語化する力を育成する授業構想-「言葉にならない」ものに向き合うことを通して-』と設定した。生徒も含めて私たちは「言葉にできない」「言葉にならない」と安易に口にするが、果たしてそれは本当に「言葉にできない」ものなのだろうか。思考することや表現すること、つまり「言葉にすること」から逃げてしまっていないだろうか。本当に言葉にならないものとは、言葉と向き合った末に、言葉を突き詰めた先に、生まれてくるものだと論者は考える。言葉にならないもの・言葉の網目からすりぬけてしまうものと向き合うことを通して、「言葉にすること」とはどういうことなのかを考えて欲しいと思い、テーマをこのように設定した。

研究内容・方法は、まず「自分の思いや考えを言葉にすることが難しいのではないだろうか」という問題意識の裏付けとして、国語科における課題や国語科教育に求められているものを調べたり、現代を生きる人の「思いや考えを言語化すること」に対しての意識を調べたりする。また、生徒を対象にアンケートを実施し生徒の意識も調査する。そして、これらを踏ま

えて「思いや考えを言語化する力を育成する授業」を構想し、研究授業を行う。

2.国語に関する現代の課題

(1)国語科の課題

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）」において、「国語科の課題」が示されている。以下の通りである。

国語科における課題

- 小学校**では、文における主語を捉えることや文の構成を理解したり表現の工夫を捉えたりすること、目的に応じて文章を要約したり複数の情報を関連付けて理解を深めたりすることなどに課題がある。
- 中学校**では、**伝えたい内容や自分の考えについて根拠を明確にして書いたり話したりすること**や、複数の資料から適切な情報を得てそれらを比較したり関連付けたりすること、文章を読んで根拠の明確さや論理の展開、表現の仕方等について評価することなどに課題がある。
- 高等学校**では、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある。また、文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること、多様なメディアから読み取ったことを踏まえて**自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること**、国語の語彙の構造や特徴を理解すること、古典に対する学習意欲が低いことなどに課題がある。

出典：小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について平成28年12月中央教育審議会（答申）より
山梨大学及び国語科教育による。

図1 国語科における課題

小中高とそれぞれの課題が示されている。「伝えたい内容や自分の考えについて根拠を明確にして書いたり話したりすること」「自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること」、つまり自分の思いや考えを言葉にし、表現することが国語科の課題の一つとして挙げられていることが分かる。

また、「国語科教育に求められるもの」についても言及されている。以下の通りである。

国語科教育に求められるもの

- 創造的・論理的思考を高めるために、「思考力・判断力・表現力等」の「情報を多面的・多角的に精査し構造化する力」がこれまで以上に必要とされることともに、自分の感情をコントロールすることにつながる「感情や想像を言葉にする力」や、他者との協働につながる「言葉を通じて伝え合う力」など、三つの側面の力がバランスよく育成されることが必要であること。
- より深く、理解したり表現したりするために、「情報を編集・操作する力」、「新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力」、「新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力」などの「**考えを形成し深める力**」を育成することが重要であること。

出典：小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について平成28年12月中央教育審議会（答申）より
山梨大学及び国語科教育による。

図2 国語科教育に求められるもの

「感情や想像を言葉にする力」「言葉を通じて伝え合う力」「考えを形成し深める力」などが挙げられており、ここからも思いや考えを言葉にする力の育成が必要であることが見て取れる。

(2)国語に関する世論調査

第1章第2節及び本章第1節より、思いや考えを言葉にする力の育成が重要であることが見えてきたが、実際世間の人々はどのように感じているのだろうか。そこで、文化庁が行っている「国語に関する世論調査」を調べることにした。「国語に関する世論調査」とは、文化庁が実施しており、日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査しているものである。

平成24年度調査で、「自分自身の国語に関する知識や能力には、どのような課題があるか」という質問がされている。結果は以下の通りである。

調査項目	n	課題										
		説明したり発表したりする能力	考えをまとめ文章を構成する能力	論理的に考える能力	読者の立場から考える能力	読者の感情を察する能力	読者の感情を察する能力	読者の感情を察する能力	読者の感情を察する能力	読者の感情を察する能力	読者の感情を察する能力	読者の感情を察する能力
調査対象	14,122	29.5	27.6	19.5	15.4	17.5	17.5	15.6	15.3	12.9	13.1	9.3
性別												
男性	975	26.5	24.5	19.5	17.5	15.5	16.5	15.5	15.5	13.5	13.5	10.5
女性	14,122	28.5	26.5	18.5	14.5	16.5	15.5	14.5	14.5	12.5	12.5	9.5
年齢												
10代	71	24.5	21.5	14.5	10.5	12.5	12.5	11.5	11.5	9.5	9.5	6.5
20代	1,711	27.5	25.5	17.5	13.5	15.5	15.5	14.5	14.5	12.5	12.5	9.5
30代	2,951	28.5	26.5	18.5	14.5	16.5	16.5	15.5	15.5	13.5	13.5	10.5
40代	3,221	30.5	28.5	20.5	16.5	18.5	18.5	17.5	17.5	15.5	15.5	12.5
50代	3,221	31.5	29.5	21.5	17.5	19.5	19.5	18.5	18.5	16.5	16.5	13.5
60代	3,221	32.5	30.5	22.5	18.5	20.5	20.5	19.5	19.5	17.5	17.5	14.5
70代	961	33.5	31.5	23.5	19.5	21.5	21.5	20.5	20.5	18.5	18.5	15.5
性別・年齢												
男性・10代	41	20.5	17.5	10.5	7.5	9.5	9.5	8.5	8.5	6.5	6.5	4.5
男性・20代	1,640	26.5	24.5	16.5	12.5	14.5	14.5	13.5	13.5	11.5	11.5	8.5
男性・30代	1,240	27.5	25.5	17.5	13.5	15.5	15.5	14.5	14.5	12.5	12.5	9.5
男性・40代	1,470	29.5	27.5	19.5	15.5	17.5	17.5	16.5	16.5	14.5	14.5	11.5
男性・50代	1,751	30.5	28.5	20.5	16.5	18.5	18.5	17.5	17.5	15.5	15.5	12.5
男性・60代	1,460	31.5	29.5	21.5	17.5	19.5	19.5	18.5	18.5	16.5	16.5	13.5
男性・70代	459	32.5	30.5	22.5	18.5	20.5	20.5	19.5	19.5	17.5	17.5	14.5
女性・10代	30	21.5	18.5	11.5	7.5	9.5	9.5	8.5	8.5	6.5	6.5	4.5
女性・20代	571	28.5	26.5	18.5	14.5	16.5	16.5	15.5	15.5	13.5	13.5	10.5
女性・30代	1,200	29.5	27.5	19.5	15.5	17.5	17.5	16.5	16.5	14.5	14.5	11.5
女性・40代	1,451	30.5	28.5	20.5	16.5	18.5	18.5	17.5	17.5	15.5	15.5	12.5
女性・50代	1,770	31.5	29.5	21.5	17.5	19.5	19.5	18.5	18.5	16.5	16.5	13.5
女性・60代	1,451	32.5	30.5	22.5	18.5	20.5	20.5	19.5	19.5	17.5	17.5	14.5
女性・70代	420	33.5	31.5	23.5	19.5	21.5	21.5	20.5	20.5	18.5	18.5	15.5

図3 自分自身の国語に関わる知識や能力についての課題 (注2)

「説明したり発表したりする能力」「考えをまとめ文章を構成する能力」「論理的に考える能力」といった本章第1節で挙げられた能力と同じものの回答率が高いことが分かる。つまり、思いや考えを言葉にすることに關する能力に対して多くの人が課題であると感じているということである。

また、平成28年度の調査では「これからの時代、特に必要だと思う言葉に関わる知識や能力は何か」という質問がなされている。結果は以下の通りである。

調査項目	n	必要な言葉										
		読者の感情を察する能力	読者の感情を察する能力	読者の感情を察する能力	読者の感情を察する能力	読者の感情を察する能力	読者の感情を察する能力	読者の感情を察する能力	読者の感情を察する能力	読者の感情を察する能力	読者の感情を察する能力	
調査対象	14,122	29.5	27.6	19.5	15.4	17.5	17.5	15.6	15.3	12.9	13.1	9.3
性別												
男性	975	26.5	24.5	19.5	17.5	15.5	16.5	15.5	15.5	13.5	13.5	10.5
女性	14,122	28.5	26.5	18.5	14.5	16.5	15.5	14.5	14.5	12.5	12.5	9.5
年齢												
10代	71	24.5	21.5	14.5	10.5	12.5	12.5	11.5	11.5	9.5	9.5	6.5
20代	1,711	27.5	25.5	17.5	13.5	15.5	15.5	14.5	14.5	12.5	12.5	9.5
30代	2,951	28.5	26.5	18.5	14.5	16.5	16.5	15.5	15.5	13.5	13.5	10.5
40代	3,221	30.5	28.5	20.5	16.5	18.5	18.5	17.5	17.5	15.5	15.5	12.5
50代	3,221	31.5	29.5	21.5	17.5	19.5	19.5	18.5	18.5	16.5	16.5	13.5
60代	3,221	32.5	30.5	22.5	18.5	20.5	20.5	19.5	19.5	17.5	17.5	14.5
70代	961	33.5	31.5	23.5	19.5	21.5	21.5	20.5	20.5	18.5	18.5	15.5
性別・年齢												
男性・10代	41	20.5	17.5	10.5	7.5	9.5	9.5	8.5	8.5	6.5	6.5	4.5
男性・20代	1,640	26.5	24.5	16.5	12.5	14.5	14.5	13.5	13.5	11.5	11.5	8.5
男性・30代	1,240	27.5	25.5	17.5	13.5	15.5	15.5	14.5	14.5	12.5	12.5	9.5
男性・40代	1,470	29.5	27.5	19.5	15.5	17.5	17.5	16.5	16.5	14.5	14.5	11.5
男性・50代	1,751	30.5	28.5	20.5	16.5	18.5	18.5	17.5	17.5	15.5	15.5	12.5
男性・60代	1,460	31.5	29.5	21.5	17.5	19.5	19.5	18.5	18.5	16.5	16.5	13.5
男性・70代	459	32.5	30.5	22.5	18.5	20.5	20.5	19.5	19.5	17.5	17.5	14.5
女性・10代	30	21.5	18.5	11.5	7.5	9.5	9.5	8.5	8.5	6.5	6.5	4.5
女性・20代	571	28.5	26.5	18.5	14.5	16.5	16.5	15.5	15.5	13.5	13.5	10.5
女性・30代	1,200	29.5	27.5	19.5	15.5	17.5	17.5	16.5	16.5	14.5	14.5	11.5
女性・40代	1,451	30.5	28.5	20.5	16.5	18.5	18.5	17.5	17.5	15.5	15.5	12.5
女性・50代	1,770	31.5	29.5	21.5	17.5	19.5	19.5	18.5	18.5	16.5	16.5	13.5
女性・60代	1,451	32.5	30.5	22.5	18.5	20.5	20.5	19.5	19.5	17.5	17.5	14.5
女性・70代	420	33.5	31.5	23.5	19.5	21.5	21.5	20.5	20.5	18.5	18.5	15.5

文化庁「国語に関する世論調査」の結果の概要 (平成28年度)

図4 今後必要な言葉に関わる知識・課題など (注3)

こちらでも、先程 (図3) と同じ能力の回答率が高くなっている。

以上の結果から、多くの人がこれからの時代を生きていくために思いや考えを言葉にする力が必要であると感じているが、実際の自分自身の能力としてはそこに課題を感じているということが明らかになった。やはり、思いや考えを言葉にする力はこれからの社会を生きていくにあたって育成していくべきものであると論者は考える。

3.授業実践について

第1章、第2章で述べたことを踏まえて授業実践を行った。

(1)授業実践の概要

- ①実習校 山梨県内の公立高等学校
- ②対象 第1学年1クラス
- ③時期 2022年10月
- ④科目 現代の国語 (注4)
- ⑤教材 『言葉のちぐはぐ』 鷲田清一 (数研出版「高等学校国語総合」)
- ⑥単元名 「言葉のちぐはぐ」を踏まえ、自分の思いや考えを言葉にするこの意味を考えよう。
- ⑦単元の目標

- (1)言葉には、認識や思考を支える働きがあることを理解することができる。[知識及び理解]
- (2)文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理

の展開などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握することができる。読むことの〔思考力、判断力、表現力等〕

(3)言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。〔学びに向かう力、人間性等〕

⑧言語活動

自分の思いや考えを言葉にすることの意味を考えて書く。

(2)教材について

本単元で扱う評論教材『言葉のちぐはぐ』は、鷺田清一氏の『〈想像〉のレッスン』(NTT出版2005年)に収められている。言葉にならない感情に着目し、「言葉にすること」とはどういうことなのかを論じている。言葉は、対象や感情を現象させる。言葉があることで、初めてかたちのないものにかたどりが与えられる。一方で、言葉にすることでこぼれ落ちてしまうものや見えなくなってしまうものが生まれたり、存在しないものを存在させてしまったりすることがある。こういった「言葉のちぐはぐ」さがテンポよく論じられている。

19 ページ5行目(注5)からの「言葉にし得ないものがある。」というのは、正確に表現するという苦行に耐えきれないことへの言い訳にすぎないことが多いからである。」という一文が、第1章で述べた論者の問題意識と重なり共感したため本教材を選択した。

(3)単元を貫くねらい

本単元のねらいが3つある。1点目は「言葉が私たちの思考や認識に大きく関わっていることを理解できるようにすること」、2点目は「言葉のちぐはぐ」さを理解できるようにすること、3点目は「自分の思いや考えを言葉にすることの意味を生徒が考えることができるようにすること」である。

(4)各時間の目標と学習活動

以上を踏まえて、全2時間の授業を構想し実

施した。また、「言葉」や「言葉を使うこと」に対する生徒の意識を調査するために、単元前と単元後にアンケートを行った。

①1時間目(90分)

目標:内容や構成、論理の展開を捉え、「言葉のちぐはぐ」とは何かを理解する。

1時間目は教材の内容理解が中心である。指示語や接続語に着目しながら、形式段落ごとに要旨をまとめる活動を行った。本教材は論の展開が速く筆者の主張を追うことが難しいため、今回は特に逆接的な表現に着目するようにした。その後、「言葉のちぐはぐ」とはどのようなことを指しているかをまとめるという活動を行った。

②2時間目(60分)

目標:自分の思いや考えを言葉にすることの意味を考える。

2時間目は、「言葉のちぐはぐ」さを実際に体験し、自分の思いや考えを言葉にすることの意味を考えることが中心である。『「一日」ができるまで』(図5)という作品を、題名を伏せて生徒に提示し、自分なりの題名を考えてもらうという活動を行った。本活動のねらいが大きく2つある。1点目は「自分が感じたこと・考えたことをなんとか言葉にする機会を実際に設けること」、2点目は「言葉のちぐはぐさを感じてもらうこと」である。言葉による切り取り方(=題名)によって作品の見え方が変わってくるといことや題名を決めたことで作品がその題名のように立ちあらわれてくるということ、一方で題名を何にしようかとあれこれ考えていた時の方がその作品のことを深く理解しているのではないかと、題名をきめたことでこぼれ落ちてしまったものがあるのではないかと、このような「言葉のちぐはぐ」さを本活動を通して実感してもらった。そして、「言葉のちぐはぐ」さを踏まえた上で、自分の思いや考えを言語化することの意味を考えて書く活動を行った。



図5 『一日が出来るまで』 細谷治寿

4. 授業実践の分析

アンケートとワークシートの記述を6つの項目(図6)から分析し、「言葉」や「思いや考えを言葉にすること」に対しての考えがどのように深まったのかをみとる。特にiiとiiiに関しては、単元前と単元後で同じ質問をしたので比較しながら分析をしていく。

分析の項目

- i 自分の思いや考えを言葉にすることは得意か、苦手か。(アンケート)
- ii あなたにとって、「言葉」とは何ですか。(アンケート)
- iii 言葉を使うにあたって気をつけていることは何ですか。(アンケート)
- iv 一時間目を終えて、気づいたこと・考えたこと(ワークシート)
- v 思いや考えを言葉にすることに関してどのように考えるか。(ワークシート)
- vi 単元を通して、感じたこと・考えたこと(アンケート)

図6 分析の項目

(1)分析 i

単元前のアンケートで、「自分の思いや考えを言葉にすることは得意ですか。」という質問をし、「得意である・どちらかと言えば得意である・どちらかと言えば苦手である・苦手である」の四つの選択肢から当てはまるものを選択してもらった。結果は、以下のグラフの通りである(図7)。クラスの半数以上が「苦手」意識を持っていた。第1章第2節で述べた論者の問題意識と生徒の実態に大きなズレはないことが分かった。

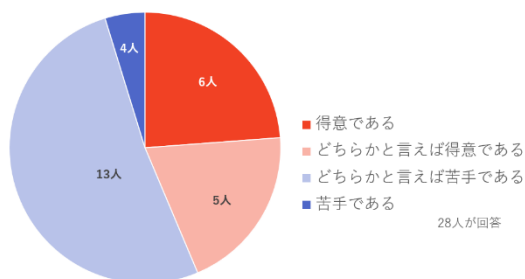


図7 アンケート「自分の思いや考えを言葉にすることは得意ですか。」の結果

また、先程の質問と合わせてどのようなときにそう感じるかも尋ねた。生徒の記述例は以下の通りである。

得意	苦手
<ul style="list-style-type: none"> • 意見を発表するときや友達と話すときにあまりつかかるときがないから。 • グループ活動などにおいて、言いたいことが相手にきちんと伝わったとき。 • ディベートするとき。 • 文章を書くとき。 	<ul style="list-style-type: none"> • 授業で指名されたとき、よく言葉がつかまる。 • 相手にうまく伝わらないとき。 • 根拠(理由)を聞かれたとき。 • 語彙力がない。

図8 「どのようなときにそう感じるか」生徒の記述例

こちらの実習校の生徒はディベートや作文などに多く取り組んでいる。授業を観察していても話し合い活動や発表など、自分の考えを言葉にし、表現する機会が多く見られた。他の高校生と比べても経験値は高いのではないだろうか。

しかし一方で、「人前」特に「家族や親しい友人以外の人」や「大人数」に対してだとうまく言葉にできない、「年齢が上がっていくにつれて人間関係の距離を考えたり、他の人の目を気にしたり、」して言葉にすることが難しいと感じるといった記述も多く見られた。これらのことから、生徒の言語化能力を育てていくためには機会をただたくさん設ければ良いのではなく、活動を行う際の人数や「聞く」側への指導など、場の設定も大切になってくるということが分かった。

(2)分析 ii

アンケートで「あなたにとって言葉とは何ですか」という質問をした。単元前と単元後で同じ質問をした。生徒の記述例は以下の通りである。

単元前のアンケート	単元後のアンケート
<ul style="list-style-type: none"> • 自分の考え、感情、知識を伝えるもの(ツール) • ミニコミュニケーションのツール、人々を繋ぐ • 人に感動を与える。人の気持ちを動かす、自分を助けてくれる • 必要不可欠 • 人によって意味が変わるややこしいもの、奇妙な道具 • 世界観、考え方 • 常に使っているもので、「無かったら」が想像できない 	<ul style="list-style-type: none"> • 意見や気持ちを相手に伝えるもの、思いを表現するもの、相手を知るため • 使い方を間違えると大変なことが起こるから気をつけて扱わないといけない • 自分が思っているよりも重い • 人によって感じ方が異なるのは当たり前なのに気づきにくい • 自分の考えを明確化する、考えを深くする、自分を高めたい • 大切な定まっていらないものを切り分ける、形を与える • コミュニケーションのツール • あやふやでつかみにくい、扱いづらい • 自己や他者だけでなく、自分のなが過去・未来を繋ぐもの • 思考を残すもの • 一歩自分を変えてくれるもの • 楽しみ親しむもの • 生きていくために必要、他者と生きる

図9 「あなたにとって言葉とは何ですか」生徒の記述例

赤字で示したものが多く挙がっていた。単元前と比べ、単元後では記述が非常に増え、27人中23人の生徒が新しい観点で言葉について考えることができた。

さらに、テキストマイニングを使って分析をした。文字の色の違いは品詞の違いを表し、文字の大きさは使われている頻度と比例している。



図10 テキストマイニングの結果

単元前も後も「伝える」が一番大きく出ているが、単元前のほうでは「伝える」に続いて「ツール」「道具」が大きいことが分かる。一方で単元後を見てみると「ツール」「道具」がぐっと小さくなり様々な単語が増えている。また、単元後には「かたち」という言葉が登場している。言葉がものや感情に「かたち」を与えているということが理解できたのだと考える。「すくいあげる」や「こぼれおちる」などの言葉も新しく登場している。これらは「言葉にならないもの」に対する記述である。「言葉は伝える道具・ツール」という考えに加えて、言葉が私たちの認識に関わっているということが新たに理解できたと言えるのではないだろうか。

(3)分析iii

単元前のアンケートでは「言葉を使うにあたって気をつけていること」、単元後のアンケートでは「言葉を使うにあたってこれから気をつけていきたいと感じたこと」を質問した。生徒の記述例は以下の通りである。

- | | |
|---|---|
| <p>単元前のアンケート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 相手を傷つけない、不快な思いをさせない、否定しない ・ 5W1H、正しい文法 ・ 言葉遣い、敬語、表現方法 ・ 頭の中で整理してから話す ・ 伝えたいことが伝わるように、誤解をうまない ・ 簡潔に、余計なことは喋らない ・ 似たような言葉の使い分け(例:「におい」「香り」) | <p>単元後のアンケート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 言葉を開通えない、本意とは異なる伝え方をしない ・ 言葉が「事実」を作り上げないように注意したい ・ 考えが限られないように言葉を選んで伝えていく ・ 語彙を増やしてどうにか伝えていく、語彙力を強化する ・ ちぐはぐに目を向ける ・ 空語にふりまわされない、言葉が物事の全てではないということを考えてから使う ・ マイナスの面をどのようにカバーするのか考える ・ 言葉にすることを諦めずに自分の語彙力の中でがんばってひねりだす、 ・ できるだけ言葉にする、言葉にしようとし止まる ・ ちぐはぐを怖がりすぎて言葉にしないことを気をつける ・ 言葉と表されるもののズレを減らす ・ 傷つけるような表現をしない ・ 言葉遣い ・ できるだけこころのなかで考えてから言葉にする、よく考えて言葉にする |
|---|---|

図11 「言葉を使うにあたって気をつけていること」生徒の記述例

分析iiと同様、単元後のアンケートでは記述が増えた。赤字で示したものが特に多く見られた記述である。単元前は「相手を傷つけない」が非常に多かったが、単元後は「ちぐはぐに目を向ける」「空語に振り回されない」など教材の内容を踏まえたものに変化している。

(4)分析iv

ワークシートの「1時間目を終えて、気づいたこと・考えたこと」の記述を分析していく。評論文の読み方に関するものと、教材の内容に関するものに分かれたが、今回は内容に関しての記述のみを取り上げる。

生徒の記述	
評論文の読み方に関して	<ul style="list-style-type: none"> ・ 段落に着目すると全体が見えるようになる。 ・ 文章自体がちぐはぐで面白い。
内容に関して	<ul style="list-style-type: none"> ・ 言葉は考えを伝える道具なんて単純なものではない。言葉を使うという概念が少し変わった。 ・ でっちあげられた「事実」に惑わされないようにしたい。 ・ 言葉って面白いと思う反面、しっかり使わなければと思った。 ・ 感情や自分の思っていることを相手に伝えることが難しいことは分かっていたが今日の授業の中で自分自身でさえ正確に伝えられていないものではないかと考えた。 ・ 言葉が事実を作り上げるという話があったがSNSでよくみかける。 ・ 実生活との繋がりを感じた。審判官になる論理感が「ちぐはぐ」なのではないか。 ・ はみ出たものに名前を付け続けられちぐはぐはなくなると思う一方で、永遠に生みだされ続けるのではとも思う。 ・ 言葉ではなくて感情のシールをつくれればいい。 ・ 「ちぐはぐ」が生まれるのは言葉を言葉自身で表しているから？ ・ 「言葉」というものを深く考えていくと「言葉」という言葉はどこから来たのだろうかとも混乱した。考えれば考えるほど難しい。

図12 一時間目を終えての生徒の記述例

「言葉を使うという概念が少し変わった。」「でっちあげられた「事実」に惑わされないようにしたい。」という教材の内容に対して理解が深まった記述が多く見られた。

また、「言葉が事実を作り上げるといった自分自身に引きつけて考えている生徒や、「はみ出たものに名前を付け続けられちぐはぐはなくなると思う一方で、永遠に生みだされ続けるのではとも思う。」「言葉ではなくて感情のシールをつくれればいい。」といった自分なりに「言葉」や「言葉のちぐはぐ」さに向き合って考えているような記述

述も見られた。

(5)分析 v

授業の2時間目に「言葉のちぐはぐ」さを踏まえた上で「自分の思いや考えを言葉にすることに対してどのように考えますか。」という問いかけをし、「大切だと思う」「無理に言葉にする必要はないと思う」のどちらかを選択してもらった。結果は以下のグラフの通りである。

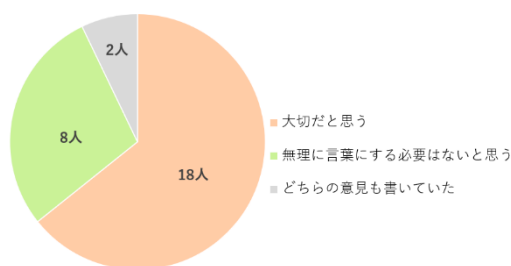


図13 「言葉にすることに対してどのように考えるか」の結果

「言葉にすることは大切だと思う」を選択した生徒の理由が以下の通りである。

分析 v で言葉にすることは「大切だと思う」を選んだ生徒の記述

- ・ 確かになんて言葉に表したらいいんだろうと思うことはあったけど、**言葉の不安定さを考慮したうえで、言葉は使っていきたい**と思った。
- ・ **言葉を使うことによって違う考え方を理解し、自分の考えが深められた**ということ、普段何気なく行っている意見交換にも奥深いものがあるということに気づくことができ、おもしろかった。
- ・ 言葉にするためには自分の考えや思いをよく認識して自分が一番理解する必要があると思う。きっと**その過程にも意味があって、言葉に何とかあらわせたときにも得られるものがあると思う**。
- ・ 言葉では伝え尽くせないところがあっても全てを言葉にしなければならぬわけでもないし、**頑張って伝えようとする姿勢が大切**なのだと思えて感じることができました。

図14 「大切だと思う」を選択した生徒の記述例

赤い太字で示した「人と関わる上で必須。」「他人と考えを共有することで視野が広がる。共有するためには言葉が必要。」「そもそも言葉にしてみないと何も起こらない。」といった記述が多く見られた。

一方、「無理に言葉にする必要はないと思う」を選択した生徒の理由は以下の通りである。

無理に言葉にする必要はないと思う

- ・ 誤解が生まれることもある。
- ・ 心が伝わってほしくないときもある。
- ・ 言葉にすると一気に**視野が狭まってしまう**。
- ・ 言葉にすることで、一つに**限定**されてしまう。自由に考えることも大切である。
- ・ 言葉にすることで、物の存在が**限定**されたり、思考を無意識にやめたりしてしまう気がするから。
- ・ 言葉にすることで、自分を客観的に知覚することはできるが、そうすることで新たなしなみを生むこともある。
- ・ 正しく言葉にできなかったら、「異なるもの」で自分を表現しなければならない。それは少し悲しい。
- ・ 言葉が進えば、ニュアンスも変わってしまう。
- ・ 言葉以外にも伝えたり、切り取ったりする方法はあると思うから。

図15 「無理に言葉にする必要はないと思う」を選択した生徒の記述例

「言葉にすることで視野や思考などが限定さ

れてしまう」という意見が非常に多かった。また、2時間目に行った絵の題名の活動を受けて言葉以外にも表現する方法はあるのではないかとこの記述も見られた。

(6)分析 vi

最後に、単元後のアンケートの「単元を通して、感じたこと・考えたこと」の記述を分析する。書く内容を特に指定しなかったため様々な記述があったが、今回は「言葉にすること」に関する記述を取り上げていく。

分析 v の「言葉にすることに対してどのように考えるか」の活動は、個人で考えたあとグループで考えを共有する時間を設けた。他者との意見交流を経て、考えは変容したのだろうか。

まず、分析 v で「言葉にすることが大切だと思う」を選んだ生徒の記述である。

大切だと思う

- ・ **人と関わるうえで必須**。言葉にしないと何も分り合えない。
- ・ 自分の思いを誰かに伝えるために必要。
- ・ **他人と考えを共有すると視野が広がる。そのためには言葉が必要**。
- ・ 人間は一人では生きていけないから。
- ・ 言葉にしないと、自分の記憶に残らない。言葉にしないと、存在できず見過してしまふ。
- ・ 言葉にすることで、焦点を当てることができ考えが深まる。より自分が何を思っているのか理解できる。
- ・ **言葉にしてみないと何も起こらない**。言葉にしないと0のまま…
- ・ 言葉にしなければ形の定かたないものがそのままになり、考えや思いが貧乏なものになり得るから。
- ・ 「言葉にしなければ伝わらないもの」「言葉にすることで初めて分かるもの」が豊かにあると思う。
- ・ 完璧な言葉に出来なくても、言葉にしようとするのが大切だと思う。
- ・ 人間の奥底に用いられてきた言葉を使わないのは損。
- ・ 言葉がもつ力や重さは言葉にすることで出てくるものだけだとそれを払拭できるのも言葉だけ。言葉にすることで起こることを恐れている人は言葉使えない。《使い方が分かってない。》

図16 分析 v で「言葉にすることが大切だと思う」を選んだ生徒の記述例

赤字で示したように「言葉の不安定さを考慮したうえでも言葉は使っていきたい」や「頑張って伝えようとする姿勢が大切」といった、言葉にすることに対して非常に肯定的に捉えていることが分かる。

続いて、分析 v で「無理に言葉にする必要はない」を選んだ生徒の記述である。

分析 v で「無理に言葉にする必要はない」を選んだ生徒の記述

- ・ 自分の考えを**言葉にしてしまうことで物事の本質が見えなくなると**があるということも分かり、**言葉にすべきことの見極めが大切**であることが理解できた。
- ・ 私自身、言葉にして相手に思い・考えを伝えることがとても苦手です。今回の授業を通して改めてそれを痛感しました。また、言葉にすることで生まれるものの一たんにも触れることができたように思いました。私は写真をよく撮っているのですが、作品として撮るとき、言葉にしてイメージをふくらませることを心がけています。**言葉にすることは大切だと思います**。
- ・ 自分も「**何て言えばいいかわからない**」とか言って逃げた**ほうがいいけど、安易に使わないようにしたい**。

図17 分析 v で「無理に言葉にする必要はない」を選んだ生徒の記述例

「言葉にすべきことの見極めが大切である」とまだ若干言葉にすることに対して懐疑的なよ

うにも思えるが、それでも言葉にしようとする意思が見えてきたような記述や、「言葉にすることは大切だと思う」「何と云えば良いか分からないという言葉が安易に使わないようにしたい」といった記述も見られ、「言葉にすること」に対して肯定的に捉えるように変化したことが分かる。

5.成果と課題

(1)研究の成果と課題

本研究の成果として3点挙げたいと思う。1点目は「言葉」や「言葉にならないもの」に生徒の意識を向けることができたこと、2点目は「言葉」や「言葉にすること」への生徒の認識が一段階上がったこと、3点目は生徒が言葉について自分自身に引きつけながら考えることができたことである。

課題としては、言葉に対する認識の変容が見られない生徒が一部見られたこと。また、1回の授業で生徒の言語化する力を育成することは難しいということである。

(2)おわりに

昨年度と今年度の研究を通して、「言葉」そのものにスポットを当てる難しさや継続的な指導の必要性を改めて痛感した。来年度からは現場に出ることになるが、評論教材に限らず、文学教材など様々な教材を組み合わせながら、「言葉」と向き合うことを通して生徒が自己や他者、世界を問い直すことができるような授業を計画的に、また継続的に行っていきたい。

注

(1)下線及び太字は論者による。

(2)(3)赤線及び青線は論者による。

(4)今年度からの科目再編に伴い、本単元で教材として使用する『言葉のちぐはぐ』は「国語総合」の教科書で扱われた教材であるが、新科目編成で考えた場合「現代の国語」で扱われる可能性が高いため今回は「現代の国語」の目標及び指導事項で授業を行った。

(5)ここで示したページ数は、数研出版「高等学校国語総合」のものである。

【参考・引用文献】

- ・AI テキストマイニング <https://textmining.userlocal.jp/>
- ・文化庁「国語に関する世論調査」の結果の概要（平成24年度、平成28年度）
- ・フェルディナン・ド・ソシュール（著）小林英夫（訳）『一般言語学講義』（岩波書店 1972・12）
- ・細谷治寿『「一日」ができるまで』（文部科学省「初等教育資料」平成18年6月号）
- ・加賀野井秀一『知の教科書 ソシュール』（講談社選書メチエ 2004・5）
- ・文部科学省「高等学校学習指導要領（平成三十年告示）解説 国語編」
- ・文部科学省中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）」（2016・12）
- ・田中実『断想IV—第三項という根拠』（「日本文学」2008・3）
- ・田中実『消えたコーヒークップ』（「社会文学」2001・12）
- ・田中実『読みのアナーキーを超えて』（右文書院 1997・8）
- ・鷺田清一『言葉のちぐはぐ』（数研出版 高等学校国語総合）
- ・鷺田清一『〈想像〉のレッスン』（NTT出版 2005・10）
- ・鷺田清一『じぶん・この不思議な存在』（講談社現代新書 1996・7）

謝辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただいた実習校の校長先生をはじめ先生方や生徒の皆さんに厚く御礼申し上げます。